

知(智)というのは姿の美しい言葉である。この中には核となる原義があるはずだが、私たちは冠される言葉の方向に惹き寄せられて独自の意味を把握する場合が多い。

たとえば、神知(智)、人知(智)、教知(智)、機知(智)などで、それぞれ上の文字を \wedge 知 \vee が照射してそれに見合った影絵として映し出す。神智ならば神的な知の像ができるわけである。

中世からルネサンスにかけての \wedge 知 \vee の移り変わりは第I章でも多少触れたように、神智から人智へのものだが、もう少し詳しく述べてみると次のようになる。

つまり、中世の世界観というのは神の永遠の相の許に一定してあったのだが、ルネサンス期の人たちは、ギリシア・ローマの古典を発掘して読むことによって人格形成を行なっていくのを目指した。ということは中世の、神の永遠の相を許の静止した知でなくて、人格を形成していくという変化のある知が生じてくる。ここに中世との決定的な相違があって、古典の中に精神の自由を求め、さらに政治的知恵も求めていくことになる。神的靜的な知を中世の知とすれば、人的動的な知がルネサンス期の知の特徴と言えよう。

たとえば、中世から存在する自由七学科(文法・弁証論・修辭学・算術・天文学・音楽・幾何学)を有機的につなげて一つの円環としているのが哲学で、この哲学が志向するものが神学とされた。この神学は中世初期には生き生きとしていたのだが、しだいにスコラ的に硬直して、ルネサンス期で批判されてそこから脱皮がルネサンスの知の、強いて言えば文化のひとつの大きな原動力となる。やはりここからも、硬直(靜)から脱皮(動)への転換が看取される。

こうした形態上の変化と同時に、性質の方はどうかというと、中世初期の大教父時代の知の特徴は、知を三位一体のうちの \wedge 子なる神(キリスト) \vee と同一視して、異教徒の知や単なる人間・自然の事柄といった世俗知に對立するものとみなし、根本的にキリスト教者の識見として解釈した。一方、十五、十六世紀のルネサンス期になると、宗教的意味合いは排されて、古典古代への意識的回帰によってキリスト教の啓示から離れることになる。

十六世紀まで知は、完全なる人間形成、普遍的な知識体得の糧となるものとされた。言い換えれば、生きていくうえで不可欠となる精神的營養を意味し、人びとは知を得ることで自己の存在理由を見出した(汎知主義)と述べても過言ではないであろう。

知的行為を、目に見えない知的で無限なる粹を瞑想することだとしたアウグスティヌスが志向した神智を、ルネサンス期の知識人は忍耐強くゆるめて、古典古代の自立性と純粋な人間の尊厳を導入していったのである。

本章では最も身近な知とも言える \wedge 機知 \vee を主題とした説話から出発して、ルネサンス期の知のタイプを『カルダノ自伝』を基軸に分析し、写本や印刷術によって知がどのように流通したかという知の流過程にまで話を進め、つづいてさまざまな知的營養の広がりを経ることにする。

1 死に際の際知

最低の人間

人は死に際に何をどう告白するか。これは人の一生において最も興味ある問題だと思われる。告白の内容、告白の仕方によって、その人の人となりが最終的に判断されるからである。特に \wedge 懺悔 \vee という宗教的な行為を持つキリスト教文化においては、人生のハイライトとなりうるであろう。

『デカメロン』一日目第一話は、その臨終の際の懺悔が話の焦点となっている。話の主人公、チャッペレットは浅からぬ因縁によって、ボルゴニヤ(フランス東部のブルゴニユ地方)の人びとの貸付けの取り立てを

引き受けることになり、その地で高利貸しを営んでいる二人のフイレンツェ生まれの兄弟の家に身を寄せることになる。兄弟は、チャップレットに取り立てを依頼したムシャットなる人物への恩義から、たいそう丁寧に彼をもてなす。ところが、突然チャップレットが病気になる。そこからこの物語は展開していく。

兄弟はチャップレットがどういう人間であるかよく知っていた。ポッカッチョの描写をまとめみると、チャップレットは公証人の身であるのに、めったに作る事のなかった書類が一枚たりといえども贖物でなければ恥ずかしくて仕方がなく感じ、普通の書類を作るときには法外な値段を吹っかけて引き受けるのに、贖物ならば喜んで無料で作ってやる男であった。また、人を傷つけたり殺したりする役を買って出たのも一度ならずあり、神や聖人を罵るのは言うまでもなかった。

さらに、教会へは決して足を踏み入れず、聖なる儀式は何もかも穢らわしいと言って、口汚く罵り、これを選んでいた。逆に、酒場やその他のいかかわしい場所ならば喜んで出入りし、女性に対してはまったく目がなく、聖者が身を捧げるのと同じ敬虔さで、詐欺も強盗も働き、あきれられるほどの大食いで大酒飲みであったため、ときおり胃を痛めている男であった。

つまりチャップレットなる男は、淫乱、貪欲、怒り、偽証、欺きの罪などの罪を犯してきている。「この世に生を享けた中でも最低の人間だった」わけである。

こうした男が病気になるって寝込んでいる。兄弟はあらゆる看護を尽くすのだが、これまでの乱脈な生活のせいで助かる見込みはないと診断される。となると兄弟たちの唯一の心配事は、懺悔もしたがらず、教会の秘蹟も受けようしないこのチャップレットの死後の始末である。もし彼がこのまま懺悔をせずに死ねば、「どこの教会だって亡骸を引き取ってくれないだろう。それどころか、野良犬みたいに溝へ投げこまれるのがおちだ。それにとえ懺悔をしても、罪の恐ろしさとその数限りなさとに、結局は同じことになるだろう」と、途方に暮れる。

一方、これを病床で小耳にはさんだチャップレットは一計を案ずる。彼は嘘の懺悔をしようというのである。「わたしは神さまに数かずの不敬を働いてきた。だから、そういうわたしは、死の床にあって、もう一つ不敬を重ねたとしても、何ほどの変化があるうか」とチャップレットは思い巡らし、できるだけ尊い修道士を呼んでくれるように兄弟に頼む。

兄弟は男に乞われたとおりに修道院に出かけて行って、一人の年老いた修道士——「聖書講義の大家で、大変な有識者でもあり、市民のあいだにあまねく厚い尊敬と崇拜の念を集めて」いた神父を連れてくる。

懺悔

これから、生まれてはじめて「懺悔」をするチャップレットと、有識で有徳の修道士との、読者にとっては抱腹絶倒の会話がはじまる。

チャップレットは、淫乱、貪欲、怒り、偽証、欺きなどの罪について、実際とは全く逆のことをいけしゃあしゃあと告白していく。

たとえば、淫乱の罪について——

わたくしは母親の胎内から出たときと同じ、きれいな身体なのです。

次に貪欲の罪について——

じつは何度かございます……なぜなら、信心深い人たちが毎年行なう四旬節の断食はもとより、毎週少なくとも三日はパンと水だけの食事を摂る習わしにしてみました。ついつい喜んで水をがぶ飲みしてしまっ

とがありますゆえ。とくに、礼拝へ行ったり巡礼に出かけたりして、疲れ気味のときには、まるで大酒飲みそっくりに水を飲んでしまいましたゆえ。また女たちが野遊びに行つて作るような、青物のサラダを、何度も食べたいと思つてしまいましたゆえ。さらにまた、せっかくの信心から断食をしておりましたのに、それには似つかわしからぬほど食事がおいしく思えてならなかったことがありますゆえ。

さらに、

父はわたくしに相当の財産を残してくれましたが、それとても大部分を、父の死後、神前に喜捨いたしました。それから、自分の生活を支えるために、またキリストの貧しい者たちを助けるために、ささやかな商売を始め、その範囲内だけで稼ごうとつとめました。そしてつねに神の貧しき者たちと、わたくしのささやかな儲けを分かちあい、半分をわたくしの必要な出費に当て、残る半分を彼らに与えました。そして創造主もわたくしにご加護をくださり、商売はますます繁盛の一途をたどりました。

偽証、中傷の罪について――

わたくしは他人の悪口を言いました。というもの、以前、近所にいた男が、無理無体に自分の妻を殴つてばかりいたので、ついに一度、わたくしはその女の身内の者に、男の悪口を言ったことがありますから。わたくしはその女が哀れでなりませんでした。それなのに男のほうは、深酒をして、神もご照覧あれ、そのたびに女をいじめ抜いたので。

欺きの罪について――

導師さま、ございます。けれども、その相手が誰であつたのか、いまもって判りません。わたくしの売った織物の代金を持ってきた一人であることは確かですが。わたくしはろくに勘定もしないままにそれを金庫の中に入れてしまい、一ヶ月ほどたつてから、正しい代金よりもそれがほんの四ピッチヨリ余計であることがわかったのです。その後、その人に会えないまま、返そうと思ひながらも一年あまり預かってしまいました。が、神さまのみ恵に代えて、喜捨してしまつたのです。

こうしてチャップレットは、△偽り▽と△とぼけ▽を乱用しながら懺悔をして、修道士の信頼を勝ち取つてしまう。修道士の方も、チャップレットのみせかけの悔悟からのがれられないで、思はず聴き入つてしまう。チャップレットはまるで魔術師のようなのである。

あげくのはてに、彼は導師に説教までする。教会で一度、唾を吐いたという告白に対して、修道士は自分たち聖職者でもしじゅう唾を吐いていると応える。すると、

感心しないことをなさつていらつしゃいますね。神への供物を捧げる神聖な寺院としては、そこ以上に清浄を保つべき場所はないはずですから。

真顔で嘘をつくチャップレットと、それに感心し切つて耳を傾ける修道士との構図は喜劇的といつてよく、ここに演劇的な効果を読み取ることもできるであろう。実際、死を前にした男の神妙な告白を信じない者がいないわけがない。二人ともとてもまじめなのである。読者はやがて死にゆく老チャップレットの悲しみを感ぜざ

るをえない。

チャップレットのような不信心な男が急に神を崇めはじめると、神の存在を愚弄し否定しているかに見えるが、そうではない。彼はいぜんとして神の大きな掌たねこぶの中にいるのであり、かえって彼は自分の嘘を見抜けない聖職者の方を皮肉っているのではあるまいか。

悪人正機と機知

さてチャップレットは立派に懺悔を行なったあと最後の塗油式もすませて、晩鐘も鳴り終わる頃に静かに息を引きとる。修道士は盛大な葬儀を取り行ない、亡骸は大理石の柩に入れられて礼拝堂の中にうやうやしく埋葬される。翌日からは早くも人びとが列をつくってお参りをはじめる。チャップレットは聖者の列に加わるのであるが、おおかたの人は彼こそ、天国よりもむしろ悪魔の手のうちに転落すべき男だと思ってしまうであろう。しかし神はそのようには考えない。

何ごとにも曇らぬ目をしたあの方、祈りをあげた者の無知や祈られた者の追放されるべき罪よりも祈りの純真さをよしとされ、あたかもその面前で追放されたはずの者が祝福されるべき者であるかのように、人びとの祈りを聞き届けられたのです。

つまり、神の宏大無辺な慈愛は人間の過ちに向けられるのではなく、信仰（祈り）の純粹さに向けられるのである。生前どんなに罪深いことをしても、臨終の際に純粹な信仰告白をすれば、神は救ってくれるのである。ここには、親鸞が『歎異抄』で説いた「悪人正機」が垣間見られる。

この物語は、高利貸しである兄弟、嘘の懺悔をするチャップレット、それをまじめに受け容れる有徳の修道士が、それぞれ自分に与えられた役割を分別を以て実行している。ここからこの話のまじめさ、平静さが顕われている、戯画化をまぬがれている。ユーモアが全編に漂っており、微笑を生む静けささえ感じられる。

世俗化が進せられつつあったとは言え、ルネサンス期はまだキリスト教の支配下にある。この物語も、悪徳商人の生きざまと懺悔とを生き生きと描き、神の慈愛の深さを充分に表出することによって、時代の文化的雰囲気、聖職者への批判も交えながら、活写していると言えるであろう。

そしてこの主人公が苦境からどうやって脱け出されたか、それはチャップレットの持っていた「機知」のおかげだと指摘できるであろう。

難関を前にしていかにそれを乗り越えられるか——これを自分の裡に秘めた、第1章の修道士と貴婦人の説話の例にもあるように、神がかりではない人間の持つ才知・才覚で処理していく。その能力がエスプリつまり機知なのである。

2 知の形

イタリヤ・ルネサンス後期に活躍した医師・数学者・哲学者・占星術者ジェローラモ・カルダノが抱いた知の概念を、ルネサンス期の知の概念の変遷の中で捉えてみよう。

カルダノには『叢智について』(De Sapientia)という著書があるが、ここではこれは参考程度に留め、カルダノの『自伝』(De propria vita)の中に顕われた知についての考え方をさぐっていくつもりである。というのは彼の『自伝』の中に表現されたさまざまな知を考察していくことで、できればカルダノの生活意識と知の關係にまで話が進展すれば幸いと思っている。